

# キャリア論の前提を問う

## アメリカなるものの特殊性を基礎に

杵渕 友子

### 1. 問題意識

就職活動（以下、就活）に入った学生を観察していると、どの学生も苦しげである。それを見て大人は、成果を得るには苦勞はつきもので、むしろそれは当人の人格的成長には好機になるとすら捉え、彼らの苦悩を歓迎するきらいがある。実は、この、地道な反復的修練がやがて別の次元の変容を当人にもたらすという捉え方自体がすこぶる日本的であるが、今回それはさておく。本稿では就活に困難が伴う理由について、学生の未熟さや状況要因以外に、あるいは以前に、キャリア教育の基礎にあるキャリア論の前提そのものが原因になっている可能性について検討を試みたい。すなわち、キャリア教育の根底にあるキャリア概念のもつ前提について、改めて考察の対象として取り上げたいのである。というのも現在の日本のキャリア教育の基礎理論はアメリカ発のもので、それを教育現場では積極的に「よきもの」として受け入れてきているが、その前提について検討してきてはいなかったからである。この前提無批判受容ののち換骨奪胎して我が物にするパターンは、日本にあっては、キャリア論のみに当てはまるものではなく、大きくは日本の外来文化に対する共通態度とも言える。実はそれはアメリカの外来宗教の受容過程にも鏡像を見ることができる。森本あんりは生体のウィルス感染に譬えていう（森本、2015、p.24）<sup>1</sup>。ウィルスは宿主に受け入れられて繁殖していく過程で、宿主に影響を及ぼしつつ、また自ら変化させて適応しつつ生き延びるのと同様に、キリスト教はアメリカ化し、その結果として今のアメリカができたと言っている。本稿で強調したいのは、アメリカの掲げる価値観はわれわれ日本人が思うほど普遍性のあるものではなく、アメリカはむしろ世界でも特殊な国家であるという点である。すなわちアメリカで生まれた理論は、キャリア論も含めて常にその点を留意して吸収しなければならないということだが、とくにキャリア論に関しては、導入後の日も浅く、かつ日本がアメリカ同様の近代国家であるという認識もあってか、日本化のためのローカライズ過程がほとんど見られないまま直に活用されているケースがほとんどであるため、そのことを懸念するのである。

さて、英語のキャリア (career) の語源は、浜口恵俊によると、ラテン語の「競走路」であるという<sup>2</sup>。時代が下って現代の日本では、その定義はたとえば「個人が職業上たどっていく経歴」(近藤美智子)<sup>3</sup>を始めいろいろあるが、要言すれば「職業を中心とした生涯」という意味

で使われることが多い。最近のキャリア論研究では、「自分のキャリアは、たった一つの独自のものであり、それをどのように創っていくか、発展させていくかは、自分の人生そのものである」<sup>4</sup>と捉えるところまで深化してきている。少なくとも教育現場で採用されるキャリア論においては、アメリカのキャリア論を基礎としている以上、その前提にアメリカの価値観あるいはエートス（行動規範）が伏在していることは間違いない。そこで本稿ではまず、どんなキャリア論がアメリカから日本に導入されているのか概観するところから入ることにしたい。そこでキャリア論に共通する枠組みを確認し、つぎにそれらの下地にあるアメリカという国そのものが擁護する枠組みあるいは行動規範の抽出を試みる。そのエートスはアメリカ人のなかに深く内面化されているため彼らにも無自覚である場合がほとんどである。そしてそれらは、先述のとおり、普遍というより特殊なはずである。その上でアメリカの宗教的価値観すなわちエートスを浮き彫りにしたい。言うまでもなく、いかなる理論もそれらからフリーであるものはないからである。

## 2. 日本の産業界・教育界におけるキャリア理論

梅澤正は、人生や生き方を「キャリア」の概念で把握しようとするアメリカ流の生き方論は「説得力があり、有意義にして有力」であると、日本人がアメリカのキャリア概念を学習する意義を強調する<sup>5</sup>。一方、その意義を認めつつも現代人の意味喪失の状態を救済するには、これらの「伝統的」なアプローチによるキャリア論では不十分であると批判的に取り上げる研究もある<sup>6</sup>。肯定的否定的のいずれにせよ、アメリカのキャリア論が日本の産業界・教育界におけるキャリア指導の根幹にあることは間違いないと言える。以下にその代表的理論を見る。

伝統的キャリア論のアプローチは、大きく2つに分けられる。1つは特性論アプローチ、今ひとつは発達論アプローチである。前者は個人の特性を分類し、適性のある職業と結びつけようというものであり、後者はキャリア発達のために何が重要か、その要因あるいは課題を特定しようというものである。

特性論アプローチの代表例はホランド（Holland, J. L）である<sup>7</sup>。ホランドは個人の特性を6つに分類し、特定の仕事に必要な要因との関係性を導きだそうとした。個人の特性を、Realistic（現実的）、Investigative（研究的）、Artistic（芸術的）、Social（社会的）、Enterprising（企業的）、Conventional（慣習的）に分け、その頭文字をとって「RIASEC（リアセック）モデル」と名付けた。それを六角形に描いたことからホランドの六角形とも呼ばれ、産業界において雇用の採用・配属に参照されることで広まり、つぎに学生の職業選択にも活用されるようになり、現在に至っている。

また、キャリアカウンセラーが利用する特性論的アプローチにMBTI（Myers-Briggs Type Indicator）モデルがある<sup>8</sup>。これはユングの類型論を基に考案されたもので、「外向か内向か」

「感覚か直感か」「思考か感情か」「判断的態度か知覚的態度か」の4指標を組み合わせて16に分類した。たとえば、内向/感覚/思考/知覚的態度 (ISTJ) のタイプであれば、会計士、エンジニア、投資マネジャー、警察官などに向いていると見なす、というものである。このような特性論は学生のキャリア・ガイダンスにも利用されている。

つぎに発達論アプローチとしては、まずスーパー (Super, D. E.) は外せない。スーパーの主要業績の1つ、ライフスパン・ライフスペース・アプローチ理論では、個人の生涯は発達段階が進むにしたがって役割が展開していくことを表した概念図を示した<sup>9</sup>。役割として「子供」、「学生」、「余暇を楽しむ人」、「市民」、「職業人」、「家庭人」の6つが書き込まれた半円形概念図は、ライフ・キャリア・レインボーと名付けられた。この図が明らかにしたのは、個人の人生において職業あるいは仕事は、重要ではあるが人生の一部を構成するものに過ぎないと相対化されている点である。図に記入はないが、他に「配偶者」、「親」、「年金生活者」の役割が加えられる場合もある。

また、ホール (Hall, D. T.)<sup>10</sup> は、キャリア形成の主体を組織に求める従来のキャリア観に対し、主体を個人に置くキャリア観をプロテイン・キャリア (protean career つまり変幻自在なキャリア) と名付けて提出した。プロテイン・キャリアを実現するにはメタ・コンピテンシーが必要で、それはアイデンティティとアダプタビリティ (適応コンピテンス×適応モチベーション) から成るとしたものである。

他に、人生の様々な転機において、それを活かしつつ成功裏に対処する方法論を提出したシュロスバーグ (Schlosberg, N.) の研究がある<sup>11</sup>。転機を乗り越えるには3つのステップ、すなわち、転機を「見定め」、「点検し」、「受け止める」の3ステップで取り組むことを提示した。要するに、その転機がどの程度の深刻さか「見定め」、もてる資源を「点検し」、使える資源を戦略的に選択しながら「受け止める」というものである。転機を活かす方向にもっていくには、「選択肢」「知識」「主体性」の有無が決め手となるという。

あるいは、個人のキャリア形成に社会的視点を取り入れた理論にハンセン (Hansen, L. S.) のそれがある<sup>12</sup>。ハンセンは個人のキャリア形成を、変化の激しい現代における個人とくに女性を取り巻く社会、文化、歴史等の変化の影響を考慮に入れた「統合的人生設計 (Integrative Life Planning)」の視点をもつことが重要であると主張した。すなわち、環境要因の変化は個人の選択を複雑にするため、それを支援するキャリア概念の必要性を論じたのである。統合的人生設計の課題として、以下の6つを挙げている：①グローバルな視点から仕事を探す、②自分の人生を“意味ある全体”として織り上げる、③家族と仕事を結びつける、④多様性と包括性を重んじる、⑤内面的意義や人生の目的を探る、⑥個人の転機と組織変革に対処する。すなわち、人生における仕事の重要性を多角的に検討したのであった。

同じく変化対応の実践的キャリア論で、クランボルツ (Krumboltz, J. D.) の理論も欠かせ

ない。クランボルツの人間観は、学習によって変わり続けることができる人間である。キャリア形成は結局のところ、偶然の積み重ねの上に成立するという現実がある。であるなら偶然の出来事を「Planned Happenstance（あたかも計画していたかのような出来事、すなわち偶然を必然）」にしていくスキルが必要で、それを認識させて支援するのがキャリアカウンセラーの役割と考える<sup>13</sup>。そのスキルとは、①好奇心、②持続性、③柔軟性、④楽観性、⑤冒険心、の5つで、5つのスキルの根底にあるのは、自ら変わり続ける人間の姿である。

以上、これらの日本の産業界・教育界に浸透しているアメリカのキャリア論を閲してきた。これらのキャリア論に共通の傾向があるとしたら何であろう。まず、キャリア（職業を中心とした生涯）を対象化して捉えているということは言えるだろう。つぎに、キャリアを段階的に捉え、因果の連鎖で進行する線型時間の全体を図示化して捉える傾向がある。すなわちキャリア全体を可視化して理解しようとしていると言える。さらに、個人の主体性を重視している。すなわち、キャリアを自らコントロールするべき、あるいはできると信じ、失敗、失意、後悔を排し、成功、満足、幸福というゴールを目指す勤勉さがある。このような共通する傾向を有するキャリア論を「よし」とする前提があるはずである。それを知るにはアメリカがどんな国柄なのか知る必要がある。つぎにそれを見ることにしよう。

### 3. アメリカなる枠組み

#### (1) アメリカのキリスト教

前項で「アメリカ人」の発想によるキャリア論の代表的論考を概観した。ここでアメリカ人を「」付きにしたのは、アメリカは西洋世界の一例ではなく、むしろ例外的な国であることを再度明示したかったからである。すなわち日本に伝播しているキャリア論は、例外的な国から生成したものであるということを強調しておきたかったのである。アメリカの例外的あるいは特殊な枠組みを、アメリカ建国事情から説き起こすとき、本稿では主に森本あんりの主張に依ってキリスト教の側面から試みたい<sup>14</sup>。アメリカ人にとってのキリスト教は、その細かい教義や生活態度における信仰の多様性に拘わらず、キリスト教信仰は一様に内面化されていると言えるだろう。すなわちこの世はすべて神の思し召しでできており、いつか最後の審判があると、理屈ではなく皆どこか信じている。たとえ篤信者でなくとも、そしてかなり知的レベルが高い人の間でも、神の存在は認められているということである（橋爪/大澤、2018、pp.48～49）。その起点はアメリカ建国のいきさつに端を発していることは明らかである。しかもそのキリスト教にはアメリカ的なツイストがあるらしい。

森本は言う、日本には「アメリカ研究」の書物は多いが、「アメリカのキリスト教」という主題は敬遠されてきた、と。アメリカがアメリカと「なっていく」過程を知ることなくして、今日のアメリカをその底流において理解することは困難である、と（森本、2006、p.4～5）。ま

た、森本はチェスタトン (Chesterton, G. K.)<sup>15</sup> の、「ほとんど神学的とも言える信念によって建てられた世界でただ一つの国」の言葉を引いて、アメリカにおける宗教および信念を理解することの重要性を強調した (同)。ここは、アメリカの特殊性に対する言及が見て取れるところでもある。アメリカを知るには、キリスト教あるいはプロテスタントを知るだけでは事足りず、アメリカに「土着化」(森本の用語) したキリスト教という要素が重要で、土着化の過程およびその結果を知る必要があるそうである。因みに、橋爪/大澤 (pp.126~127) は、キリスト教がアメリカ社会に入っていったわけではなく、キリスト教の内在的論理だけで変わっていったわけなので、「土着化」という言い方は当たらないと指摘している。

土着化の前に、アメリカは共通の過去を持たない人たちでできた国であるということにも注意を向けておきたい。しかもその移民の流入は現在も続いている。いずれの国も動態的過程にあると言えるが、殊にアメリカは非常に動態性の強い国と言える。歴史 (過去) に根源を持たない国をまとめていくには、宗教と理念あるいは理想 (未来) を中心に据えるしかなかったとも言えるが、現に、先進工業国のなかで唯一アメリカだけが、高い宗教的関心をもち、かつプロテスタント優勢の国である (森本、2006、p.6)。ある意味、立国に人為を自覚すれば、人々はそれに対して神威をもって安定を得ようとしたとも言える。そのアメリカは、1620年にプロテスタントであるピューリタン (のちにピルグリム・ファーザーズと呼ばれる) がイギリス国教の圧迫を逃れて、メイフラワー号でプリマスに上陸したときに始まるとされている。

アメリカとキリスト教の結びつきは、渡航の動機そのものが宗教的だったところにあるのだが、それ以前の南北アメリカ大陸が無人地帯であるわけではなく、コロンブスの新大陸「発見」以降すでに、スペインやポルトガルの植民地拡大政策とキリスト教 (カトリック) 布教活動の対象地域になっていた。ただし当時の西洋列強の目はむしろ天然資源のある中南米に向けられており、領土拡張と布教活動の動きは同調しつつも、先住民に対してそれぞれに異なる対応が国家と教会の間に対立をもたらしたこともあった (森本、2006、p.19)。折しもイギリスは、ヘンリー 8 世の離婚問題を端緒にローマから独立して国教会を発足させたところで、南米帰りのスペイン船の積載品を略奪して国家財政の足しにするような国だった。やがてスペインは覇権を失い、17世紀に入ったあたりでイギリスは遅ればせながら、アメリカでの植民事業に着手する。やり方としては、すでに各国の東インド会社などの例にある会社経営の手法がとられた。以後、アメリカの植民地時代は 1776 年の独立戦争まで続くことになる。アメリカの植民地経営が他と異なったのは、開墾と農業を目的にした定住型が主流だったことである。イギリス国王の特許状 (チャーター) を得た複数の会社がすでにアメリカ入りしていたところ、イギリス国内における国教会体制の強化の動きに失望して、国教会を離脱したピューリタンが国外移住を決意した。彼らはオランダ入植に失敗したのち、アメリカにあるヴァージニア会社の管轄区域内への入植許可を得て出発した。しかし到着したのは予定地より北のプリマス湾はコッド岬になっ

た。ここで、その後のアメリカを方向づけるひとつの出来事が起きたのである。

実はメイフラワー号に乗船していた百余名のうち半数こそは宗教的理由の出国であったが、残りの半数は航海と入植後の労働に雇われた者たちで、彼らは困難を伴う航海に何かと不満を募らせていた。上陸直前になって管轄区域外に到着することを知った彼らは、「聖徒」たちとは別行動をとる動きを見せてきた。そこで両者で合議の上、「お互いが契約により結合して市民政治体を形成し、共同の秩序と安全を保ち、法律と公職とに服従すること」を約束した「メイフラワー契約」が交わされたのである（森本、2006、p.27）。すなわち、行政上空白の地域において異なる出自の者同士が、平等に相互の合意と契約をもって新たな権力の正当性を創出したのである。それを可能にしたのは、もともと聖書には神と人間の関係を「契約」で理解する要素が含まれていたため、人々はすでに契約概念になじみがあったからで、直感に導かれてのことと言える。しかしホッブス（Hobbes, T.）やロック（Locke, J.）らの思想レベルの社会契約とほぼ同時代のことでもあるので、無意識の時代精神というものが背景にあったとも言える<sup>16</sup>。出身地の欧州では権力関係は世襲制であったところ、異質の者同士の平等の関係を謳ったわけで、これは多元国家アメリカの誕生と呼ぶにふさわしく、アメリカ建国の端緒を他でもなく1620年に求める理由がここにある。賭けの気持ちで新天地に赴いた人たちである。そこは身分制もなく、家族もいまだなく、つまり社会的中間としてのプロテクションのない、裸で直に社会に向き合うことになった個人同士で成り立つ場所である。そこで身を守るのが契約の精神であり制度である。また、教会はそのなかにあって唯一ともいえる中間社会である。そしてプロテスタントを — 公定教会制というはあるが — 国教扱いにはしなかったのは、領主や国王の信仰に従うことよりも、個人の信仰の自由（この場合、信仰の自由とは、信仰の有無の自由ではなく宗派選択の自由のことである。無神論は論外。なぜなら信仰は、個人の選択ではなく、とうに神の恵みで与えられたもので、それを論理で制度化したのがヴァージニア信教自由法である）を上位に置いたからである。自由意志による入植と個人の信仰の自由、そしてその後の移民流入（そのなかにその後の奴隷貿易による黒人の移入も忘れてはならない要素である）という不断の運動で特色づけられた流動的なこの国においては、離国もまた自由のところ、とどまることを選択した国民の存在によって愛国心が逆照射される。互いの自由を認めれば、当然の帰結である個人間の衝突は、神と人からなる宗教ではなく人同士の法律（契約、ルール、マニュアル等）に則って処理される法治の国となったのである。彼らがキリスト教を国教扱いにすることはしなかったのは（もっとも当時のアメリカはまだ「国」の体はなしていなかったが）、教会より聖書を重視するプロテスタントとしては当然のこととはいえ、個人の意思決定を体制側の決定よりも優先する国であることを選択したのである。こうして彼らは新しい国、しかも世俗国家を自らの手で直接つくるという意志を共有しつつけることになる。なおその後プリマスは、1691年にマサチューセッツ湾植民地に吸収合併された。

マサチューセッツで特筆に値するのは、入植直後から大学が設立されたり、信仰教育を兼ねた初等教育読本が出版されたことである（森本、2015、p.37）。1636年には植民地議会により、牧師養成の目的を兼ねたりベラルアーツ系の大学としてハーバード大学が設立された。歴史的に見ると、ピューリタンの入植したニューイングランドは、人口あたりの大学卒業者が異常なほど多かった地域である（森本、2015、p.33）。やがてそれはハーバードに代表される知識と権力が固定的に結びついたエスタブリッシュメント、すなわち政治や経済の中枢を担う知識階級が生まれる素地となった。その後それに反感をもつ人々の、現代で言えばトランプ大統領の票田（彼は富裕層ではあるものの、選挙民の心理を代弁する巧みな直言がとくにプアホワイトを熱狂させる）に代表される勢力を生むことになる。

当時はプロテスタントのなかのカルヴァン派（ピューリタン）が主流であったが、その後は多種多様の個人が流入し、聖書の解釈も多様になるにしたがって宗派あるいは教会が新たに生まれていった。のちに続く移民には正規の教会員は少なくなり、2代目3代目になると子らは親ほど熱心なキリスト教徒ではなかったり、あるいは親が正規の教会員でないと子は洗礼を受けられなかったりと、問題が蓄積してきた。すなわち未受洗や回心体験のない人が増え、教会も規律が弛緩し、人心が不安定になっていった。そんなときに起きたのが、信仰復興の「大覚醒」の波である。「大覚醒」とは正規の聖職者ではない巡回説教師が、キリスト教的説教を通じて人々を熱狂させることである。かのベンジャミン・フランクリンも、ある伝道師の集會に疑いつつ参加したが、すっかり感化され支援に回ったというエピソードもある（森本、2006、p.50）。大覚醒の波は1743年を皮切りにアメリカ史上独立後も含めて何回か起きた。何年か何十年かおきに各地で起きて伝播し、教派間の相違を相対化し教会や民族的出自も超えて連帯感を生み、地域の一体感を醸成していった。それはまた一般信徒が回心体験を通じて個の自覚を深め、民主的で平等な権利の意識が開発される契機ともなった（森本、2017、p.75）。そこから「イギリス領」植民地がはじめて「アメリカ」として自覚されるようになってくる。アメリカ独立の直接のきっかけは、英国国王の課税強化であるが、その前に、当初はアメリカ大陸に渡った「イギリス人」であった彼らも、信仰復興の波を経験しながら「アメリカ人」としてのアイデンティティを確立しつつあったのである。そして「独立宣言」、「ヴァージニア新教自由法」、「連邦憲法」などによって、アメリカとキリスト教の政教分離が徹底されていった。このように、宗主国による植民地経営の一環としての布教とは異なり、移民であるキリスト教徒による西漸運動でできた非常に特殊なケースがアメリカである。

なかでも19世紀半ばの第2次信仰復興運動（「大覚醒」と同じ）は、教派分布地図を変え、「素朴で楽観的で非階層的な」アメリカのキリスト教を形成する力となり（森本、2006、p.82）、かつそのラディカルな平等観念は社会改革すなわち奴隷廃止運動、女性の権利拡張運動を推進した。1890年の国勢調査では、「フロンティア」が消滅し、人口は倍増した。都市化と産業化

が進むなか、金銭的成功は個人主義とダーウィンの進化論によって正当化され、容認される国となった。

さて森本は、アメリカには17世紀のピューリタンからアメリカキリスト教史に一貫して流れる神学的論理があると指摘する。それは、マサチューセッツ湾植民地総督のジョン・ウィンスロップから現トランプ大統領に至るまで広く共有される論理で、「富と成功」の福音である（森本、2017、p.31）。アメリカ人のいう「成功」には、「この世」的成功に宗教的救済が含まれている（橋爪/大澤、2018、p.100）。本来聖書には、神と人間の関係を「契約」で理解するところがあったが、それはあくまでも「片務契約」であった。すなわち、神の愛は一方的に与えられるものであった。たとえ人間が不運に見舞われたと思っても、神の愛はゆるぎないと信じるのが信仰であった。それが、ピューリタニズムがアメリカで土着化するにつれて、次第に「双務契約」に変化していった。すなわち、神と人間がお互いに契約履行の義務を負う存在になったということである。となると、人間が義務を果たせば、神は見返りとして恩恵を与えるという関係になる。やがてこの論理は逆回転し、「正しい者は神の祝福を受ける」から「神の祝福を受けているなら正しい者だ」へと変わった。もとよりプロテスタンティズム、とりわけカルヴィニズムの神学においては、誰が救われるかは神の予定により予め決まっている。それを人間は知り得ないし、人間の行いによって変更されるものではない。しかし双務契約の論理を採用すれば、もし自分が救われると予定されているなら、「この世」的成功があるはずとなり、自ずと禁欲的で勤勉な生活態度になる（ヴェーバーのいう「資本主義の精神」<sup>7</sup>の精華）。自分の成功には正当な根拠があるという考えである。もはやそれは宗教的契約ではなくビジネス上の取引契約と違わぬものとなり、実利志向を奨励する。この固有の発展の結果、生まれたのが「富と成功の福音」である（森本、2017、第1章）。しかしこの論理には表裏一体の裏面がある。努力したにも拘わらず失敗した者は、「この世」的にも日の目を見ない上に、神からも見放された者となる。つまりアメリカのキリスト教は失意の者を救えず、不運不幸な民は置き去りにされる国となった。失意のセンチメントは上述の知識階級に対する反発へと備給される。もとよりアメリカは旧世界に反発して脱出してできた国であるところから、権力の介入に対する忌避感、信教の自由をはじめ一貫している。このアンチ・知識階級すなわち反知性主義もまたアメリカの特徴である。信仰復興運動で中心的役割を果たした巡回説教師は、大卒でもなく教会から正式に派遣されたのでもなかった。その何の権威にも頼らない身分がまた人々の心を掴む要因でもあり、社会的平等というきわめてアメリカ的理念を呼び覚ました（森本、2017、p.66）。平等の主張は、神父をおかないプロテスタント信仰のなかで、精神的な領域に限定されていたが、やがて身分制のないアメリカの実社会における平等意識を育て上げていった。すなわち、政府や権力に対する不信感や、個人の平等意識は、アメリカ人にとっては社会的正義というより、神学的態度だということである。



ここでアメリカのキリスト教の特徴をまとめておこう。まずアメリカのキリスト教は、個人救済である。これはアメリカに限ったことではなく、キリスト教一般に当てはまることではあるが、因みに、キリスト教はユダヤ教から派生したが、ユダヤ教はユダヤ民族を救う集団救済である。つぎに、平等意識の徹底がある。神の前での人間の平等を、社会的平等にまで浸透させようとしてきた。それは「大覚醒」のあと活発になった女権拡張運動や奴隷廃止運動に見たとおりである。祖国の欧州では、世襲によって身分や階層などの権力構造が形成されていたが、そこから飛び出した人々の別天地がアメリカである。もし地上の個人の営みに衝突があれば、政治的権力や教会の権威の家父長的介入で問題を解決するのではなく、平等な人間同士の契約によって秩序の回復が図ろうとする。世界に冠たる訴訟国家アメリカたるゆえんである。アメリカでは宗教のみならず社会的問題も、政府などの上位権力に頼らず個人間の交渉で対処したいと考える。たとえば老後の生活や医療も個人の問題としたいのがアメリカ人で、なかなか政府のアジェンダにならない。そしてプロテスタントを国教とせず個人の信教の自由を保証してきた。聖書の教えの中身も信仰態度も勝手自由として、多様な教派や教会ができた。そしてアメリカではいつのまにか、キリスト教が片務契約から双務契約に変容して普及していった。そうして双務主義は「富と成功の福音」に帰結した。すなわち成功者は勤勉で神に愛された証と見なされるようになり、逆に不遇の者には怠惰と神に見放された者というホールマークが付くようになった。

## (2) プラグマティズム

さて、アメリカを理解するためにアメリカのキリスト教を概観してきたが、キリスト教に特徴づけられた宗教的国家にしては、その世俗性についてはどう説明できるか。宗教的でありかつ世俗的でもあるのがアメリカなら、両者の位置関係はどうなっているのか。それについて森本は上述のとおり、「富と成功の福音」をもって説明した。橋爪と大澤はその両局面を、プラグマティズムを介して視野に収めることを提示する（橋爪/大澤、2018、II）。

プラグマティズムとはペース（Peirce, C. S.）の造語で、「アメリカでしか出てこなかった」、20世紀初頭に広まったアメリカ的思考のことである（同、p.141）。プラグマティズムの論者は、当該思考を1つの考え方というより哲学であると主張する。西洋の中世以来の伝統では、神学から哲学が分離し、神学が扱う真理と哲学が扱う真理があったとした。前者は正しさの源泉は神にあり真理は1つ、後者は複数ある真理を巡って正しい哲学（者）とそうではない哲学（者）が論争をする。プラグマティズムでは、その論争に決着をつけず、自分の経験に良い結果をもたらすのであれば、それは真であり、思うような結果をもたらさないのであれば、それは偽である、と考える。自分の生活にプラスであれば受け入れ、マイナスであれば受け入れないでいい。中世の哲学では真理性の基準が聖書にあるが、プラグマティズムでは経験のほうに真理

性の基準を置くところが、大きく異なる。中世までは知性は神にのみ宿るものだったのが、一部の知性ある人間が経験から、実験という手続きを通じて、真理を発見できるとしたのが、科学革命である。では科学革命とプラグマティズムとはほぼ同じかという、これもまた大きく異なる。科学革命は経験に対し懐疑的のところ（なので諸経験を所定の手続きを経て優越をつけて、その知見を更新していく）、プラグマティズムは経験を素直に信頼する。なぜアメリカにプラグマティズムが生まれたのか。その前史として1830年代ごろにアメリカ独特の思想の超越（または超絶）主義が出てきた（Emerson, R. W. など）。アメリカの思想は、基本的に欧州の直輸入であったが、超越主義は人間に経験を越えた直観があると認めるもので、言ってみれば、経験からは離れるものである。超越主義とプラグマティズムの共通点は、どちらも教会、宗派、組織、ドグマから無縁である点である。すなわち超越主義は単なる神秘主義ではなく、大衆の直観的経験を知識人が言語化したものである。自然との一体感や大自然と自我とのつながりを生活のなかで覚醒することで、状況に変わりはなくともその見方が変わってくることを、思想的に表現した。つまり超越主義には、経験を越えた部分と経験重視の二面性がある。後者を強調すれば、プラグマティズムとの共通性から、プラグマティズムの前史という言われ方になるが、アメリカなるものを理解するには、前者を認めつつ後者を前景化したのがプラグマティズムであることを見ないといけない。すなわち、単なる科学主義、資本主義、世俗的であるのがアメリカではなく、それを超越した部分があると感じさせるのがアメリカであるということである。プラグマティズムも初期とその後と、また論者によって様々であるが、アメリカのベースには無意識のキリスト教があり、その上に多種多様な宗教や宗派が共存して、その共存を許しているのが世俗の法律である。この流儀をひとつの哲学に高めたのがプラグマティズムである。さらに立法を効力あるものにする条件に、無意識のエートスがあり、それは近代人のエートスであった。すなわち、自分は神に従属し、神に従属する自分だけが自分を従属させることができるが、自分を他者には従わせないというエートスである。これはメイフラワー契約の背景に見る情景である。以上がアメリカの二面性を説明する哲学、プラグマティズムである。

#### 4. ディスカッション

アメリカは宗教性と世俗性に代表されるように両極に引き裂かれた二面性をもつ国であり、それがアメリカを特殊にしていることが理解できた。崇高と実利、非合理と合理、この矛盾をつなぐものとして、「富と成功の福音」あるいはプラグマティズムによる説明も見た。しかしどうしてそうなったのか。

後進国の先進性ということがIT関連で言われるが、アメリカの先進性はそれが当てはまるケースではない。アメリカは当初未だ国でもなかったからである。歴史もないのだから、そこに至るまでの一貫した構造もなかった。かといって戻ることはできないので前を向くしかない状況、

それはすでに矛盾的存在である。この屈折した心の拠り所は神しかない。そして参照すべき歴史がないとき、まず大学を創ったのであった。中世の遺産なき近代化、産業革命なき近代工業化を果たしたアメリカであるが、アメリカがアメリカになる過程で生み出したのは、自由、平等、個人、契約、勤勉、成功、未来志向（目的重視）、線型時間である。それは民主主義、個人主義、資本主義、平等主義、科学主義となり、いつのまにかアメリカは西洋世界の先頭ランナーになった。それらはそのまま近代産業社会の価値となり、特殊であるはずのアメリカがデファクトスタンダードになったのである。しかし当該価値が一般化したとしてもその特殊性が消えたわけではない。近代性もまた普遍ではないのである。近代的価値は異なるアングルからただ1点を指している。すなわち画一化を通じた効率である。そこからの逸脱を許さないのがフーコー（Foucault, M.）<sup>18</sup> の指摘した近代的権力でもあった。

対してアジア的価値をさらってみれば、一族重視、世襲制、長幼の序、不文律、過去志向（祖先崇拜）、循環的時間などが挙げられるが、アメリカのそれとはほぼ真逆であることが見て取れる。同時にそれらは前近代的でもあるので、アジア的価値は「オクレテイル」と見なされるのが通り相場である。その点日本はアジアなのか先進国に分類されるのか。よくある設問である。明治維新後、日本政府は欧化啓蒙政策をとった。そのとき数々の伝統的事物が悪しき因習として排除されていったが、第二次大戦以降はアメリカの占領政策により、平等主義、個人主義、契約主義の法制化が進んだ。ともあれ、ここでは日本は歴史を通じて前近代的価値観の上に近代的価値観が上乘せられてきた国であるという、一般的通念に合意しておく。ということは、日本人は表層的にはアメリカ的価値を受け入れているが、深層では逆方向の価値が同居しているということになる。私たちはこの矛盾については気づいていたが、実は真に受け入れられないことは忘れがちである。先に示したアメリカ発のキャリア論の全体的傾向を繰り返しておく、対象化、段階的、可視化、因果論的・線型的・不可逆的時間、個人の主体性、合目的的、ゴール・オリエンテッドである。すなわちアメリカのキャリア観では、キャリアはライフタイムの時間の終点に向かって、段階的目標を掲げつつその都度クリアしながら進むことと言えるだろう。日本はそれを表層では追随しつつも、深層では個人は独立的というより依存的であり、環境を切り開くよりは受容的あるいは後追的である。つまり、「攻め」より「待ち」の姿勢に価値を認める。この表層と深層の間の齟齬は通常は無自覚のため、本人にとってはただただ名状しがたい違和感があるだけとなる。実はこれが、学生が辛くなる理由の1つではないか、ということを上記で考察した。

## 5. 結語

さて、残る問いは、ならば日本的なるものは何かであろうが、それはつぎに期すことにして、現在の近代世界が直面している問題がある。国家レベル個人レベルでの極右ポピュリズム、債

務危機、気候変動、富の偏在、デジタル監視あるいはデジタル犯罪等々である。自己中心的リーダーが世界をさらに不安定にしているが、ヒーローの出現は期待できそうもない。なぜなら私有財産を認める資本主義も平等の権利を認める民主主義も限界を超えて発展した結果が現状であるなら、それは結果であり原因であるからであり、強力なリーダーの登場で解決できるレベルではないからである。対象が複数あり、正解が1つではないとき、つまり混沌とした複雑系の現実のなかにあるとき、求められる姿勢は絶えざる対話を通じて解答を求め、修正を恐れず進む再帰的構えであろう。

それをキャリアに当てはめると、およそ教育の受益者は個人であると同時に社会でもあるが、近代国家がキャリア教育を主導すれば、キャリア教育は国家に有為な人材の養成となり、そうでない人材は棄民となる。また、企業が主導すれば、企業は国境を超えるのがグローバル時代で、トップをはじめ企業組織の成員の国籍は問わず、中心に正社員を据え手厚く遇し、周辺を代替可能な有期雇用をバッファーとし、時に応じて有能なフリーランスして活用する<sup>19</sup>。キャリア教育では何をしたいのかどうなりたいのか（目標設定）、個人に回答を迫るが、学生に対しては1つの解があるという仮定をせず、状況と対話的にスパイラル運動で進むこと、キャリアとは事後に形成されるということを強調したい。

---

#### 〔参考文献〕

- 1 森本あんり 2015 反知性主義 — アメリカが生んだ「熱病」の正体 新潮選書
- 2 浜口恵俊 1979 日本人にとってキャリアとは 日本経済新聞社
- 3 近藤美智子 1993 「キャリア」 森岡清美・塩原勉・本間健平編集代表 新社会学辞典 有斐閣
- 4 青島祐子 2009 東京女子大学女性学研究所 矢澤澄子・岡村清子編 女性とライフキャリア 第一章キャリア理論の現在 勁草書房 p.10
- 5 梅澤正 2001 職業とキャリア シリーズ 職業とライフスタイル5 学文社 p.184
- 6 神戸康弘 2016 「意味マップ」のキャリア分析 — 「個人の意味」が「社会の意味」になるメカニズム 白桃書房
- 7 Holland, J. L. 1985 Making vocational choices: A theory of personalities and work environments (2nd ed.) Englewood Cliffs NJ: Prentice Hall (渡辺三枝子他共訳 1990 『職業選択の理論』雇用問題研究会)、他
- 8 Myers, I.B. 1962 *Manual: The Myers-Briggs Type Indicator*, Princeton, NJ: Educational Testing Service
- 9 Super, D. E. 1980 A Life-Span, Life-Space Approach to Career Development *Journal of Vocational Behavior* 16:282-298 National Institute for Careers Education and Counselling、

---

他

- 10 Hall, D. T. 1976 *Careers in Organizations* Santa Monica CA: Goodyear、 他
- 11 Schlossberg, N. K. 1989 *Overwhelmed: Coping with Life's Ups and Downs* (武田圭太・立野了嗣訳 2000 『「選職社会」転機を活かせ』 日本マンパワー出版)
- 12 Hansen, L. S. 1997 *Integrative Life Planning : Critical Tasks for Career Development and Changing Life Patterns*, San Francisco: Jossey Bass
- 13 Krumboltz, J. D. 2004 *Luck is No Accident: Making the Most of Happenstance in Your Life and Career* Oakland, C: Impact Publishers (花田光世・大木紀子・宮地夕紀子訳 2005 『その幸運は偶然ではないんです!』 ダイヤモンド社)、 他
- 14 森本あんり 2006 アメリカ・キリスト教史 — 理念によって建てられた国の軌跡 新教出版社
- 15 Chesterton G. K. 1908 *Orthodoxy* Independently published 2020 (安西徹雄訳 2019 正統とは何か 春秋社)
- 16 橋爪大三郎/大澤真幸 2018 アメリカ 河出書房新社 p.35
- 17 Weber, M./大塚久雄訳 1985、1986 プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 (上、下) 岩波書店
- 18 Foucault, M. 1975 *Surveiller et Punir - Naissance de la Prison* Gallimard (田村俶訳 1979 監獄の誕生 監視と処罰 新潮社)
- 19 熊沢誠 1997 能力主義と企業社会 岩波新書